

私の一冊

社会福祉学科 高木 剛 先生

福島 智 著 『ぼくの命は言葉とともにある』

小鹿図書館 369.2704/F84

本書は、福島智(ふくしまさとし)氏が全盲ろう(以下、盲ろう)になってから、見て・感じて・考えたことを綴ったものです。とりわけ、「言葉の重み」や「生きることの意味」について、苦悩しながら探求し続ける福島氏の姿が、明確にうつし出されています。

福島氏といえば、盲ろうでありながら大学教授(東京大学先端科学技術研究センター)として活躍していることで有名です。福島氏の著書は多数あるうえ、テレビ番組にも出演しているため、余計な紹介は不要と言ってもよいでしょう。ちなみに、本書に記載されている略歴を見ると、福島氏は3歳で右目を、9歳で左目を失明しました。そして、18歳で失聴し盲ろうとなりました。そして、盲ろう者として初の大学進学(東京都立大学:現・首都大学東京)を果たしました。その後、金沢大学助教授などを経て現在に至っています。

さて、本書の構成は、プロローグ「「盲ろう」の世界を生きるということ」から始まり、第1章「静かなる戦場で」、第2章「人間は自分たちが思っているほど強い存在ではない」、第3章「今この一瞬も戦闘状態、私の人生を支える命ある言葉」、第4章「生きる力と勇気の多くを、読者が与えてくれた」、第5章「再生を支えてくれた家族と友と、永遠なるものと」、第6章「盲ろう者の視点で考える幸福の姿」、そして、あとがきとなります。

本書の内容を概観すると、福島氏は、小学2年生の頃にヘレン・ケラーの真似をして自宅の近くを歩いた体験に触れ、「将来、まさか自分が盲ろう者になるとは思わなかった」と、当時の心境を綴っています(プロローグ, p14)。そして、光と音を失った高校生の頃を振り返り、

「私はいきなり自分が地球上から引きはがされ、この空間に投げ込まれたように感じた。自分一人が空間のすべてを覆い尽くしてしまうような。狭くて暗く静かな世界。ここはどこだろう。(中略)私は限定のない暗雲の真空の中で呻吟(しんぎん)していた」と、当時の困惑した心境を綴っています(プロローグ, p14)。

このような状態の中で、福島氏は他者とのコミュニケーション方法について模索し始めます。その結果、指字という方法に行きつきますが、しかし、それは単に人生の序章に過ぎず、やがて「盲ろう者として生きる意味」や「真の幸福とは何か」を思索することになります。福島氏は家族や友人等との交流はもとより、ヴィクトール・E・フランクル著『意味への意志』(春秋社)をはじめ、芥川龍之介著『杜子春』(新潮文庫)、立花隆著『アポロ 13 号・奇跡の生還』(新潮文庫)、北方謙三『楊令伝』(集英社)など多数の著書などからヒントを得て、自らの考えを整理していきます(第1章～第5章)。その中で、福島氏はフランクルの公式「絶望＝苦悩－意味」を引用し、「意味＝苦悩＋希望」を導き出します。そして、この公式から、「苦悩の中で希望を抱くこと、そこに生きる意味がある」と、自身の考えを主張しています(第6章, pp240～241)。また、福島氏は前述のフランクルの公式を応用し、「コミュニケーション」「文脈」「交わり」の関係を「文脈＝コミュニケーション＋交わり」の公式で表わし、「人の感覚と言語をめぐる文脈とは、交わりをもったコミュニケーションのことであり、人はそうした文脈の中で生きていくという本質的な性質をもっている」という考えを主張しています(第6章, pp241～244)。

そして、本書の締めとして、福島氏はあとがき(p261)の中で、北方謙三氏との出会いに触れ、北方氏から「福島先生の言葉は鼓動(＝命の証)ですよ」と言われ、言葉のもつ偉大な力(生きる証としての具体的な力)を実感したことを綴っています。

本書のタイトルが示すとおり、福島氏にとって言葉は命に匹敵するものであると思われます。もしかしたら、実は私たちにとっても、言葉はそのくらいの深さや重みがあるのかもしれませんが。本書を読む中でそのことを考えさせられます。また、普段、私たちは生きることや幸福についてあまり意識することがありませんが、本書はこれらの意味や真の価値などを思索するきっかけになると思います。